

総評全金住友重機械支部の活動と組合分裂： 星加文夫氏・藤井正剛氏オーラルヒストリー

UMEZAKI, Osamu / NAGUMO, Chiaki / 南雲, 智映 / 梅崎, 修

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン：法政大学キャリアデザイン学会紀要 = Lifelong learning and career studies

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

91

(終了ページ / End Page)

108

(発行年 / Year)

2013-09

〈資料紹介〉

総評全金住友重機械支部の活動と組合分裂^(*)

—星加文夫氏・藤井正剛氏オーラルヒストリー—

連合総合生活開発研究所研究員 南雲 智映
法政大学キャリアデザイン学部准教授 梅崎 修

1 解題

本稿は、総評全国金属労働組合住友重機械（四国機械・住友機械）支部で長年組合役員を務めた星加文夫氏と藤井正剛氏のオーラルヒストリーである。住友重機械の労働組合は戦後すぐに結成されたが、お二人からは組合役員としてのキャリアと組合活動について語っていただいた。また、住友重機械の労働組合は昭和47年11月に分裂しており、多数派が同盟系の造船重機労連へ加盟したが、お二人には少数派として総評全国金属に残った立場からこの組合分裂について語っていただいた。

お二人の証言は、大きく分けると2つの資料的価値があると考えられる。第一の資料的価値は、総評結成後の労働運動の高まりが地方企業の中でどのように展開したのかという観点である。総評全国金属は、1946年に結成した総同盟全国金属が総評結成を契機に解散し、金属機械産業の産業別組合として再編され、総評に加盟した組織である。また、総評事務局局長の高野実氏の出身母体であり、「高野時代」と呼ばれた総評初期の熱気を代表する産業別労働組合といえよう。四国機械（住友機械）の労働組合も、結成当初は総同盟全国金属に加盟し、総評全国金属となった後もそのまま所属している。そして総評全国金属にとって住友機械の労働組合は、藤田高敏、飯尾増雄などの役員を輩出した主力組合であった。それゆえ本稿は、

総評結成前後の組合リーダーの意識の変化、そして初期総評の運動を支えた組合員たちの意識を知る上で貴重な資料といえよう。

第二の資料的価値は、組合分裂という一般的に資料として残りにくい歴史事実の情報が得られることである。特にお二人は、少数派組合に所属していたため、文書資料がほとんど残っておらず、証言の価値は高いといえよう。戦後日本の労使関係は、昭和30年ころまで激しい対立関係にあり、その後徐々に協調の関係に変質したと考えられているが、このような変化が生じたのは、1955年に設立された日本生産性本部が推進した生産性運動の影響が大きいと考えられる。生産性運動が各産業の労使に影響を増す中で、昭和40年代には幾つもの大企業で総評系・中立労連系の労働組合で脱退や分裂が生じているが、住友重機械工業の労働組合もそのようなケースの1つといえる。組合分裂前の住友重機械工業には、旧浦賀重工との合併があったため、3つの労働組合——総評全国金属住友重機械支部、全造船機械浦賀分会、全造船機械玉島分会——が存在していたが、これら3つの労働組合において昭和46～47年にかけて相次いで分裂が起り、旧組合派はいずれも少数となった。星加氏、藤井氏は総評全金の組合員として残り、少数派として組合活動を続けたが、かつて居た組合事務所は多数派の新組合が入ることになり、過去の資料の多くが廃棄されている。それゆえ、当時の様子を伝えてくれるお二人の証言

は貴重である。

聞き取りは2012年11月1日、連合愛媛東予地協事務所内で実施した。実は当日は、調査前のご挨拶のつもりでうかがったのであるが、星加氏と藤井氏にお話しさせていただいたところ、即インタビューを開始させていただくことになった。ご多忙中、急遽インタビューに応じていただいた両氏に心より感謝を申し上げます。また、両氏をご紹介いただいた連合愛媛の木原忠幸会長、杉本宗之事務局長、および本稿の取りまとめでお世話になった(株)アドレスに感謝を申し上げたい。なお、本資料は日本学術振興会科学研究費補助金「戦後労働史におけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の基礎的研究」〔基盤研究 B〕【研究課題番号：23330115】の研究成果の一部である。

2 口述記録

《組合活動の開始と戦後の住友機械の労働組合組織》

梅崎 星加さんは、いつごろから労働組合活動に参加されましたか。

星加 私は小学校を出て、住友機械に工員から入って、労働組合専従で随分長いこと組合運動に参加しました。多くの先輩から指導を受けましたね。

梅崎 工員として入られたのは昭和14年ですか？

星加 はい。

梅崎 こちらでお生まれですか。

星加 そうです、新居浜ですね。

梅崎 太平洋戦争で戦地に行かれたのですか。

星加 そうそう。志願して内地勤務でした。住友機械は海軍の軍需工場だったんで、私たち工員も工場へ入れない所があって、そんな所には憲兵もいたようです。私は入社して罝書き職場で1年半ぐらい、その後、事務所に変わって、工作機械などの工程計画や工場の生産状況の調査をする係の一員となりました。

昭和18年頃には、ガダルカナル島やアッツ島

の玉砕など、日本軍の撤退が相次ぎ、私も日本が負けてはいけないと思って昭和19年、航空隊へ入隊し、1年ほどで敗戦になり復員しました。

しばらく失業していましたが、昭和22年3月、住友機械（当時は財閥の解体で「四国機械」に改称）に再入社しました。そして1年も経たないうちに労働組合の青年部役員に選ばれ、藤田高敏さんや、もう亡くなられた飯尾増雄さんから指導を受けながら組合活動をしました。飯尾増雄さんは、全国金属労働組合中央本部の副委員長にもなりましたが、長く住友機械支部の委員長、愛媛県議会議員などの要職を歴任されました。藤田高敏さんは、戦後間もない頃、高野実さんの指導を受け、労働組合の結成当時から主要役員として活躍され、つづいて愛媛県議会議員、衆議院議員を歴任。お二人とも労働運動、社会運動の先頭に立って活動されました。

南雲 再入社されたのは工員組合、職員組合が統一された後ですか。

藤井 工職両組合の統一は、資料でみると昭和22年の4月1日ですね。

星加 私が住友機械（当時は四国機械、昭和27年に社名復元）に再入社したのは、昭和22年3月1日でした。新居浜地域では、機械、化学、鉱山、共電など住友系の親会社とそれらの関連企業（下請け）の従業員・家族・親戚を含めると、新居浜市民の8～9割の方々が何らかのつながりがあった「住友のまち」とも言われていました。

先輩からの話や私の体験から話しますと、戦後は食糧難、物価高騰などで生活が非常に苦しかった。工員組合が昭和20年12月に結成され、まず取り組んだのは3.5倍の大幅賃上げ、退職金の引き上げと工員・職員の差別解消でした。さらにメーデーなどでは「山車」を作り、商店街の大通りを行進やデモをしながら、「米を！」「食糧を！」「大幅賃上げを！」などのプラカードを掲げて訴え、商店街の人達も紙ふぶきを二階から散らし歓迎してくれました。

このような対会社要求のほかに、組合独自の活動もありました。例えば、「厚生部」で衣料品・

靴などの生活用品を安く仕入れて組合で販売（戦時中の青年学校校舎を改造して、組合事務所や会議室に使っていたので、教室などの空き部屋を商品の売り場にしていた）、これが昭和25～26年ごろから生活協同組合へと発展しました。

「演芸部」では、特技のある組合員で、漫才、流行歌、浪曲、芝居などを計画して、食堂で全組合員が集まって観る演芸大会も年1～2回行なわれ楽しみました。これは工職統一後、文化部として改名し、機関紙「働く者」の発行（月刊）、団交報告や組合の機関決定は「速報」ビラを作って正門前で入退場時に全組合員へ渡していました。そして昭和26年以降は「教育宣伝部（略称：教宣部）」に変え、以上の外に生花、お茶なども女性組合員を中心に毎週1回の練習と年1～2回の発表会を、会社の食堂や近くのお寺を借りて行なっていました。

「体育部」では、バレーボール、卓球、ソフトボール大会なども組合が用具を支給して奨励し大会も行ないましたが、会社の方も並行的に行なっていました。

工職統一後、新たに設けたのが「生産部」で、これは会社の受注、売り上げなどの実態を調査し、毎月の時間外労働協定時の資料などに活用、昭和30年以降は「調査部」と名称を変え今まで通り、会社の実態調査や他組合と交流して労働条件などの改善にむけた資料の収集・作成の活動も行なっていました。

《総同盟時代》

南雲 次に、総同盟時代ですが、安平（やすひら）鹿一さんがオルグとして、四国機械に来られていたという話を聞いたことがあるのですが。

星加 そうです。

南雲 星加さんは、安平さんとの接触はありましたか。

星加 はい。私はその当時、安平先生は雲の上の人で、あんまり話すこともなかったんですが、たまたま皆さん偉い人が団体交渉にいて私が留守番をしているときに安平先生が来られて、そこ

で3時間ぐらい安平先生とね、総同盟時代のいろいろな話を聞きました。

とにかく安平先生は高野さんとかね、総同盟系の指導者の人たちと懇意な関係もあったりしてね。安平先生は松山出身ですが、新居浜で代議士になり、労働組合の指導もされてね。ご承知のように産別系は公務員関係中心に組織されていましたが、なかなか強くてね。民間でも急進的な組合は産別に入って活動していました。その話を聞くと、上司を取り巻いて洗濯デモ（ぐるぐる回りながらつるし上げたり）をする、また脅すような形で窓からつるしたりね。聞くとひどいことやるんですよ。

裏話ですけど、一部の指導者が労働者を煽りにおおってね。その宣伝をして、争議に入ってもなかなか要求が通らんのですよね、その当時は。組合員もだんだん疲れてね、もう組織分解しそうになりかけたならさっと手を引いてね。その後始末は安平先生たちがして苦勞したと言っておりましたけどね。指導方針で組合員は大変です。

総同盟は比較的穏やかな指導をしていたので、私たちはその指導に賛同していました。私たちは産別系統の労働運動にはついていけないという雰囲気でした。

南雲 住友機械の組合の執行部では、皆さんがそういう考えでしたか？

星加 皆そうです。もちろん共産黨員の方も大勢おられたしね。いろいろ意見はあったけれど、大体この地域は全部総同盟系で固まっていたからね。その当時は企業内組合の色彩が強く、産別別の労働組合の影響が少なかったですね。だから、そういう関係でもうすんなり総同盟に入りました。昭和25年に総評ができて、産別系は残りましたが、その中から総評に結集、最初はもう全部統一せんかと言いましたが、結局はあのとき三つの労働組合に分かれてね。総評、産別会議、それから全労会議かな。新産別は総評に加盟したけれども2年後に脱退したね、旧総同盟よりもまだ緩やかな労働組合だと言っていましたね。その前ですが、もう全部（総評として）一緒になろう

というのが、朝鮮事変の前でした。まあいろいろありましたからね。

南雲 総評ができる前にも（四国機械の）労働組合の委員長が結構変わりますよね。我々が調べた限りでは加藤長次さん、この方が・・・。

星加 工員組合の初代の組合長だったね。当時は委員長と言わないで組合長と言うたんですけどね。

南雲 組合長ですね。この方が総同盟派だと思うのですが。

星加 そうです。県会議員もやられたけどもね。新居浜では、安平先生を中心にした総同盟系の運動が全体的に大きな流れというような形でね。総同盟に入って、住友化学も鉱山もね。住友系の企業はもちろん、中小企業関係ももちろんね、すんなり総同盟系で固まったんです。

《高野実の往来》

南雲 総評ができる前の総同盟時代に、高野さんがいらしたとか、逆に若手の組合役員が高野さんのところに話を聞きに行くことはあったんですか。

星加 ありました。藤田（高敏）さんはね、随分高野先生の教えの影響を受けているんですよ。だから、藤田さんに聞くと、高野さんの関係はよくわかると思うんです。

南雲 高野さんが来られたのですか。

星加 はい、来たりもしたしね。

南雲 行くこともあった？

星加 はい。行ったのは藤田さんだけだったと思います。直接教育指導を受けたのは。

梅崎 高野さんが来るのは、講演会というか、組合主催の集まりに高野さんが来られて、現在起こっている状況などをお話しになるとか、そんな感じですか。

星加 そうです。だからね、その当時は全員大会で1,500人とか2,000人とか集まってね、そんなところでお話しされたり、争議とかの応援にも来られたと思うけど、私の記憶では数回ですね。

南雲 当然高野さんも泊まらなくてはいけな

いですね。

星加 そうです。

南雲 夜に何かお話をしましたか。

星加 そうです。私は新居浜では話さなかったけどね。井関農機がね、全国金属に入った（昭和43年6月）ときに私たちは井関と交流があったからね。たまたま松山で泊まって、高野先生も一緒になってね、いろいろお話を聞いたことがあります。アジテーションじゃなくて、非常に理論的にお話しされよったからね、皆が納得されてね。合化労連の太田さんに敗れて総評事務局長を辞めま

《総評に所属した背景》

梅崎 総評ができるという話になると、結局総同盟と総評で割れちゃうわけですよ。

星加 割れて総評作ったのではないんです。呼び掛けは、詳しいことは覚えていませんけれども、要するに労働組合が三つも四つもあってはいかんと、やっぱりみんながね、統一せないかんと

梅崎 総同盟系の人たちは再建して、もう一回全金同盟を作りますよね。

星加 そうそう、産業別組織も全金同盟と全国金属に分かれていました。

梅崎 そうですね。全金同盟と総評の全国金属で分かれますが、もともとは終戦直後のころは皆さん総同盟に入っていた人たちではないですか。

星加 総同盟の大方の組合が総評に加盟したけれども、2年後一部（右派系）の脱退があったんだと思います。総評結成の時、昭和25年にはほとんど総評に入ったと思いますよ。私たち何の抵抗もなしに。

南雲 それで、住友機械は総評の全金ですが、一方で全金同盟もあるわけで、それに関して組合の中で…。

星加 これね、やっぱり政党との関係もあるんですよ。後で社会党から分かれて民社党ができましたね。

南雲 ええ、右派ですね。

星加 そう、右派、左派いましたね。その影響が多分にあるんです。私たち、労働組合の人は、案外新しい人ばかりでね、知識があんまりないんです。正直言って戦前派の方々の教育を受けて運動した関係もあってね、大いに政治とつながったんですよ。総評は社会党系、同盟は民社党系。それから産別は共産党を支持して大きく分かれ、分裂したね。

このように政治とも大いに絡んだら私は分析しとったんです。労働者自身、役員自身はどちらがええか、どちらを選択するかというより戦前派の労働運動をしていた人たちや地域の状況によって、私のところでいえば総評系、社会党系となったと言ったほうがいいですね。組合員もね、民社系もおるし、社会党系もおるし、共産党系も、いろいろおりましたからね。政党支持問題では組合の機関決定でもめましたが、多数決で社会党を中心とする階級政党（1963年の原水禁運動分裂以降は社会党1本）に絞りました。

梅崎 民社党系の方は、どちらかという戦前でも年配の方で、それで若い方はどちらかという社会党系になったのかなあという、世代の問題があるのかなと思ったんですけど。

星加 いや、そんなことはなかったね。

藤井 なかった。

星加 だからね、業種別や地域の事情によって例えば西条にね、クラレがありました。

倉敷レイヨンは繊維関係の工場で、新居浜にもあったんですけど、西条が中心でね。そういうところは総同盟系で私たちとは運動は別だったですね。だけどね、運動は別でも労働条件などの調査で交流はしよったんです。恐らくそういうふうに分かれたのは、産業別の違いや上の指導による政

治的な背景もあって、そんないろんな絡み合いで組合の上部団体や支持政党を選んだと思います。

南雲 確か安平鹿一さんは代議士として、社会党から出ていますよね。

星加 そうです。

南雲 その影響が一番だったのでしょうか。

星加 戦後の労働運動に安平先生の影響は大きいです。高野先生とかね。

梅崎 その指導を受けてきた流れでやはり総評という？

星加 そうです。だから、その当時の指導者や地域、産業などによって変わったと思います。

南雲 それについては組合内部から異論も出てこなかった？

星加 はい。ただ、戦後の産別の闘争には付いていけんとか。それから片一方の会社とのなれ合いみたいな運動にも付いていけんと。そんなのが幹部仲間ではありましたけどね。公式にそんなことを議論したり、どちらがええかとかいうのは私の記憶はあまりないですね。

《昭和25年以降のたび重なる解雇とストライキ》

南雲 総評ができる前（昭和25年以前）は、住友機械の組合はあまりストライキを打っていないですよ。

星加 ああ、昭和25年まではあんまりしなかった。（昭和24年6月に賃上げで始めて時間外労働拒否を実施）

南雲 総評結成後は、人員整理もあってストライキをかなりやられたと思うんですが、頻繁にやるようになったきっかけはありましたか。

星加 ありました。昭和25年の2月にね、第一次首切り（382名と労働時間1時間の延長、諸手当の大幅切り下げなど）が出ましてね。あのときにはね、住友系の労働組合や愛媛地評と全国金属の各組合の支援を受けて、デモ行進、抗議活動、なかでも本社のあった大阪の住友ビルに赤旗を立てるなどの大衆行動を展開しました。

藤井 昭和25年の第一次企業整理反対闘争です。

星加 首切り、賃下げ、労働時間の延長とかね。とにかく我々が飲めんような条件を出されてね。ストライキ権を確立して全員大会でデモやったりしてね。団体交渉をしてもなかなかうまくいかないですよ。そしたら会社の方にもなかなか首切りが実行できないものだから、朝出勤したら掲示板にね、110名だったかな、氏名が貼り出されていたね。とにかく100名余りの解雇する人の名前をずらっと書いてね、掲示板に貼り出したりして。

南雲 解雇者リスト、指名解雇ですね。

星加 指名解雇。そんなひどいことをやりましたね。それで、私たちもストライキをやったりね、いろいろやったね。第二次もあるんよね。昭和25年6月に会社から人員整理600名、労働時間の1時間延長、賃金2割カットなどの企業整備案が出された。

藤井 第二次の闘いは、昭和25年の9月から11月。

星加 「全金愛媛地方本部35年史」に詳しく書いてありますけどね。このときの写真も出とるね。すごかったですよ。私もかなり走り回って。

梅崎 戦後、四国機械にお勤めになって、このとき初めてストライキをするわけじゃないですか。そうすると、ストのやり方は戦前の人から教えてもらったのですか。それとも高野実さんのように、中央からストのやり方・戦術を教えてくれる人が来たのでしょうか。

星加 高野先生はね、あんまりそういう戦術面のお話はされなかったね。一般的にはこういうことだからこういうふう頑張らないといかんというお話はありましたけれども。名前は熊本虎三さんといったかな。1回だけ闘い方でお話に来られたことがありました。

南雲 総同盟のオルグとしてですか。

星加 そうですね。戦前はこうだったとかいうお話をされたことがありますね。だけど、あんまり細かい指導はなかったですね。だから、私たちもいっぺんに全面ストというんじゃないにね、部分ストから入ったです。忙しいようなところを狙うてね。部分ストライキをやって、それでだんだ

ん拡大していった。最初は時間外拒否ぐらいから始まりましたが、上部団体の役員からは細かい指導はなかったですね。

南雲 そうすると執行部で考えて行った。

星加 そうです。執行部で戦術委員会を作りましてね。組合長は闘争委員長に、書記長を戦術企画部長に、専従・非専従の執行委員は戦闘態勢で行動隊長とか、情宣部長とか、そんな名前をつけて、そのメンバーで戦術委員会を開き方針を決めていました。

南雲 その後、住友機械の組合のなかで闘争を引っ張る方が出てきましたか。ストライキの戦術とか闘争に強い方。

星加 それはいろいろ議論しましたが、最終的には三役でまとめて方針を決めたね。

賃上げ闘争だったと思うけれども、2週間ぐらい全面ストをしても会社が言うこと聞かんようになってね、わが方も当然、賃金カットがあるから、その兼ね合いで困ったときもありました。

そんなときに藤田さんなんかはね、なかなか立派なことを言って激励していたね。「我々がつらい苦しいということは、相手も苦しいんだから頑張らないかん」とか言ってね。藤田さんや飯尾さんは、情勢がわるくて皆がシュンとしている雰囲気ね、皆を笑わせてみたりするなど、いい指導をされていましたね。私たちは、その指導の下にいろいろ動いていました。だから昭和25年は今言ったように2回の企業整備があって、それから、朝鮮事変が始まって、特需でちょっと景気が回復したけれどもね。それで昭和26年の終わりぐらいだったかな。

藤井 昭和27年ぐらいです。

星加 昭和27年になるんかな。首切りがまた出ましてね。昭和29年、それから30年。昭和29年のときにはね、詳しくは資料を見ていただいたらよう分かるけれども、会社の再建案に対して、労働組合の再建案（対案）を作ったりしている闘いました。このとき（昭和29年）は、わが方の主張が通りましてね。ほとんど希望退職だけで終わったんですけどね。

それで会社は物足らんということで今度は職場を切り崩しまして、昭和30年の2月だったかな。また首切りを出してきましたね。そのときにはもう会社の方は職場を徹底的に洗脳していたからね、組合はストライキ権が取れない。やむを得ず藤田さんと私と、亡くなった横山さんの3人でハンガーストライキを正門前でやったこともありました。

南雲 ハンストをやられたんですか。

星加 ハンストをやったんです。ストライキ権が取れんもんだからね。そうかというて、会社の首切り、肩たたきをそのままではいかんとか言って、正門前にテントを張ってね。3人でやったんです。最後には少しだけ助けてね、終わったんですけどね。

《会社再建を優先する組合員意識と会社の労務対策》

南雲 何度も繰り返し首切りがありますが、だんだん組合員が会社のやってることはおかしいということで、戦闘的になってくることはあったんでしょうか。

星加 むしろ逆ですね。

南雲 逆ですか？

星加 はい。やっぱり会社も日頃からよく見ているね。組合運動をよくやるような連中、活動しよるような連中を先に解雇するもんだからね。残った人は確かに技術的には立派な人だけれども、組合運動面ではだんだん弱体化していったね。例えば、就業時間前に仕事を始めたり、休み時間になってもみんな休まない。現場を回ってみると、このような状態でした。それでね、私たちは、現場を回るとね、今まで積極的に話してくれよった人が話してくれなくなり、話しかけてもだんだん遠ざかっていきましたね。

それから昭和30年の解雇をされて以降ですが、組合の委員会を開いてもね、労働組合の要求よりも生産を増産するような方針を運動方針に入れるべきだと言うてね。私はそのとき書記長で困りましたけどね。組合運動よりもむしろ会社再建の方

が先だと、堂々と組合の委員会で意見が出たりしてね。随分苦労しました。そういう点ではね、運動が強まるどころかだんだん弱まっていったね。

南雲 会社の再建が先だという意識が組合の中に強くなって、組合としてのまとまりがなくなるわけですね。

星加 そうですね。会社側からいえばいい話ですよね。

南雲 われわれは以前、兵頭傳さんからお話を聞いていたのですが、そのときの印象と全く逆でした。

星加 会社の人事労務対策は巧妙ですよ。管理職を使って、今の総評全金のような指導を受けて運動していたら会社は駄目になる。総評全国金属は左翼の運動だという宣伝を徹底的にやりましたね。私たちも何回も見つけ次第抗議にいったりしましたけどね。

南雲 解雇反対での闘争であり、それだけでは特に左派的ではないと思うのですが。

星加 私たちは左翼的な運動とは思ってないし、当たり前の運動をしたつもりです。でも、会社の宣伝は「左翼的」だと言っていた。総評の中でも全国金属が一番左派だと言てね。「左翼運動では会社が立っていかんからね、もう変えなあかん」と言って、特にひどかったですよ。それで、昭和30年の首切り反対闘争のスト権が取れなくなってね。

それから昭和30年の闘争が終わってからすぐといってもいいぐらい、部分的にだんだん会社の労務対策が強まりましたね。大阪金属の役員Nさんと飯尾さんが食堂で話していたときに、「住友系の会社の労務政策は、話してわからん者は排除して配転させる。話してわかるような者は少々の異動ぐらい。ちゃんとランクを作ってね、一人ひとりの労働者をランク付けしているようだ。住友機械は大丈夫か」と、内情を聞かされてね。それで私たちなりに組合で頑張りましたけど力不足で、会社はお金と人事権を持っているからね。組織的には昭和44年6月に浦賀重工と合併した頃から、生産性研修会で総評・全金の労働運動を

批判し、スト罪悪宣伝、スト権投票への介入、労働組合の体質改善を公然と示唆、管理職を中心に泊り込みの生産性教育で反全金の洗脳、職制を使つての組合役員選挙への介入などを次第に強めてきました。そして昭和47年に組織分裂を余儀なくされたのですが、詳細は「全金愛媛地方本部35年史」を見て下さい。

《昭和30年代は全国金属の統一闘争で成果》

南雲 少し話は戻りますが昭和30年代、高度成長期に入りますね。このころ住友機械では毎年のように賃上げでストをやっていますね。

星加 そうです。総評は、全国金属もそうなんですけど、賃上げを中心とした春闘と一時金・労働協約などの統一要求を柱に闘いました。

藤井 統一交渉で妥結まで。

星加 これは要求、交渉、闘争、妥結の四つを統一してやろうと言ってね、総評全国金属の指導のもとに統一闘争で目に見える成果をひき出した。特に景気もよかったしね。

南雲 そうですね。統一闘争だと全国金属の基準で要求を出すのですね。

星加 そうです。だから、私もね、本部の執行委員もちょっとやったりね。賃金専門委員会に参画してね、統一要求から統一妥結まで、どういふふうにするかの議論に参加し、いろいろ経験しました。

さらに金属共闘で、フランスの一番大きな労働組合（CGT）と交流の機会があって、全国金属から私、それから鉄鋼と造船から各1の3人が代表でフランスへ行きまして統一闘争の話をしました。40日ほどフランス・ハンガリー・チェコの労働組合役員と交流したなかで、日本の統一闘争は立派だと評価してくれました。そのとき私は、今景気が良いけど、このような上部の指示による闘争でいいのかと内心想ったですね。というのは、フランスはご承知のように五月雨戦術と悪く言われているが、あそこはもう徹底的に下からそれぞれ分会ごとに相談しおつて、同じ企業でもストライキのできるところから入っていくんです。

徹底的に議論しましてね、積み上げ方式なんです。

日本の労働運動は、総評が決め、産別が決め、それを受けて単組が決めるという上からでね。だから闘い方も違うし、宣伝の仕方も向こうの方の宣伝は徹底した宣伝なんです。こちらの方はなんか「請負闘争」みたいなね、これはいかんなあというのちょっと反省しましたね。

南雲 今、請負闘争という言葉があったんですが、要求は全金基準でやるとして妥結権は、単組が持っているものなんですか。

星加 そうなんです。単組が持つてるといふか、できるだけ他の組合に迷惑かからんようにね、一定の基準を決め、基準より以下は早く妥結しないようにする、これは戦術委員会では決めますけどね。これ以下はとにかく頑張ろうと努力し、それが一つの目安になって全体の水準引き上げに寄与しました。

全国金属の愛媛地本は最初12支部（組合）ぐらいだったのですが、たまたま私が地本の書記長になった昭和30年代に景気がよくなったのと合わせて労働組合づくりの機運が高まってね。昭和32年～35年頃は、次から次と労働組合が増え全金に加盟しましてね。その指導とオルグで日夜忙しく大変でした。とくに賃上げなどを要求すると、わが社だけ出すと倒産すると言って有額回答しないので困りました。

そこで昭和36年春闘から住友機械の下請け中小企業でも統一交渉を行うようにしました。中小の経営側と組合側の代表が一堂に会して交渉、最終段階ではあっせん役として住友機械の労務担当と全金愛媛地本委員長が参加した団交で解決してきました。

特に単価を決めるのは住友でしょう。だから、中小の社長が、「なんぼ私たちが出そうと思ったって単価が安かったら出せんからね、住友の偉いさんにも言うてくれ」と言うんですよ。それで住友の労務担当のあときは橋本部長さんも一緒に統一交渉に参加してもらってね。こういうふうになつたから単価も上げてもらわんとということをや兼ねてね、最初はうまくいきよったけどだんだん

難しくなってきました。

とくに住友重機械支部の分裂後は、統一交渉に直接参加の企業が激減したので、集団交渉から支部の企業を回る巡回交渉に変えて、できるだけ同水準に近い回答を引き出すよう工夫しました。これには定年まで愛媛地本書記長を務めた藤井さんが苦労されたけどね。

住友機械の社員は、私の記憶では昭和30年に1,620人位までに減ったと思うですよ。それが昭和44年に住友機械が浦賀重工を合併した頃は従業員数も1万人を超え、社名も現在の住友重機械工業に変わりました。その後、不況やグローバル化のなかで分社化を進め小さくなっていますけどね。私が担当していたころは新居浜だけでも中小支部が35～36ありましてね。井関農機の組合も全国金属に加盟して、今治の関係も入れたら44～45支部ができてね。そういう勢いは造船までいましてね。波止浜造船とか来島造船とか、そういう造船関係も私たちは呼び掛け、とにかく統一闘争をやろうじゃないかって。それで同盟関係の組合や中立の組合に働きかけて、愛媛の金属共闘(6,000人)を結成、私が初代の委員長になって新聞に出たりしてね。その後、飯尾さんを中心に指導してくれてね。名実共に立派な愛媛金属共闘会議が組織化されました。

南雲 そうなると、やっぱり住友機械が賃金を上げないと波及しないですよ。それもあってかなり頑張られたのですね。

星加 その点はありますね。

南雲 あともう一つ、このころのストライキの雰囲気について聞きたいんですけど、やれば上がるような雰囲気はありましたか。

星加 会社回答がね、なかなか上がらなかったですよ。

南雲 ストライキをやってもなかなか上がらない？

星加 なかなか出さんかったですね。会社の西村、橋本、兵頭、原ラインというのはね、労務管理のベテラン中のベテランだからね。

梅崎 もともと組合の委員長をなさった方(西

村氏)が人事部長で、その後、担当重役になり社長になったのですから、ある意味で交渉の手の内は知られていたわけですよ。

星加 そうですね。だからね、会社も何か基準がなければいかんと言ってね、もうつぶれましたけど新潟鉄工とかね、それから京都の島津製作所とか、石川島重工や日立製作所の機械部門と交流して、賃金などの労働条件を調査しました。それらを目安にして交渉するなど、そんなのが1つの基準になりましたね。

ところがね、昭和44年に浦和重工(造船部門)と合併してからはね、住友機械は今までのような機械だけのレベルで賃金や労働条件を決めるのではなく、今後は造船を含む重工業関係のものを基準にすべきだと会社が言い出してね。そんなことから労働組合も全国金属からの脱退、重工の関係組合への工作を秘かに計画、実行へと進めたようです。

藤井 昭和46年当時、造船重機共闘が翌年2月に造船重機労連結成。

星加 造船を含めた形の労働条件を考えないかんというようなことでね、今の労働組合のやり方、全国金属のような方針ではいかんということでやられました。

南雲 確か造船も含めると給料がちょっと下がるんですよ。

星加 そうです。造船関係は他産業に比べ、ご承知のように浮き沈みが激しいんですよ。機械も比較的そうですけどね。

南雲 造船は機械以上に浮き沈みが。

星加 機械以上ですね。

南雲 組合分裂前の話に戻りますが、昭和30年代のストライキを毎年のようにやっているころは、組合員はストライキをやってほしいという雰囲気だったんでしょうか。

星加 総評、全国金属で一つの方針が決まったらね、私たちはそれを基に支部段階で具体的な要求を決め、全国的な統一闘争のなかで実現をめざすという方針を職場討議にかけ機関で決定する、とくに統一闘争の意義、必要性などを職場ごとに

説明したね。

南雲 方針が来たからやっぱり皆さん協力してくれと。

星加 そうそう。協力するというより支部要求の基準ができたということですね。

南雲 これは全国で統一的にやっていることだからと、そういう話ですかね。

星加 まあ簡単に言えばそういう感じじゃね。全国的に統一闘争でいこうとなっているからというんでね。それを基にした支部要求を決め、私たち役員が職場へ入って職場ごとに説明したりしましたが、みんなから盛り上がって要求を決め、それを出すというフランスのようなことではなかったです。

《60年安保反対闘争の統一行動》

梅崎 1点、どうしても気になるのは、総評はよく「ニワトリからアヒルになった」って言われているじゃないですか。これを研究者が素直に聞いたとき、何でアヒルになったのかなと思うのです。要するに、すごく戦闘的に変わったという言われ方ですが、住友機械で組合活動をなさっているときに、総評の方針が変わったと感じましたか？

星加 恐らくね、私も長年やったけれども、これという特別なことはないけれども、1つは昭和30年からの高度経済成長でね、会社が利益を非常に出しかけた。その反面、今までの労働賃金、労働条件があまりよくなかったからね、賃金なり、いろんな面で。それを改善しようという意欲と相まって統一闘争というのが生まれて。そういう関係でストライキをやるというんでね。もちろん反安保とかね、反基地闘争、沖縄を返せとかいうんでね、いろいろと政治的な闘争も統一的にやりましたね。だから、政治と経済は不可分の関係、労働条件だけの要求ではわれわれの生活は守れないと。とくに60年安保反対闘争の統一行動で、岸総理が辞めたときなんか、この間テレビで出りましたけどね、デモを国会にかけ、国会になだれ込んでね。私たちも守衛につかまりそうになってね…。

梅崎 新居浜から国会の安保闘争のところへ行かれたっていうことですか。

星加 交替でずっと行きよったですよ。昭和35年の安保反対闘争。

藤井 三池・安保ね。

星加 あのときはすごかったです。

梅崎 それについてはどういう言い方でしたか。闘争の応援しに行くということですか。

星加 応援というよりも安保を反対しよう。まじめに考えていましたよ。解説のパンフなどで学習をしていましたからね。組合員に対しても情報を流して説明しました。

梅崎 そうしますと、それは企業の組合の方針というよりも。

星加 そうです。だからね、会社は、会社と関係ないような政治活動を持ち込んでストライキをやったり、運動をやるのはもってのほかだというんで随分やられましたわ。

藤井 会社の立場としてはね。

南雲 そのときは総評なり全国金属が方針を出したのでしょうか、動員がかかったから行った感じでしたか。それともむしろ自分からすすんで行ったのでしょうか？

星加 いやあ、やっぱり動員かかって。ただ、動員かかってでも組合員が理解してくれなければできませんけどね。みんなもやっぱり組合の情報や役員の説明、それに新聞なり何なり見て、なるほど執行部の言うとおりにというんでね。だから、皆から盛り上がってというよりも、やっぱり私たちは全国的な中央指導の下に動いたというのが本音でしょうね。だから、そこら辺に日本の労働運動の弱さがあつたんよね。企業別に組織されとることとね。

会社の景気のええときはええけどね。会社の景気が悪くなったらそんな闘争はどうかという批判がだいぶ出ておりましたしね。それは確かにね、言われる面があったと思います。だけど、私たちは、やっぱり政治と経済は不可分のものだという立場で職場オルグをしたね。

梅崎 でも、それはこの時期の総評の労働運動

の特徴ですよ。

星加 うん、そうね。

《住友機械の労働組合の青年部について》

梅崎 ただ、住友機械という会社の中で見たときに、星加さんが最初におられた青年部が一番過激だったと思うんですけど。

星加 いや、そうでもないですね。私たちは、過激な活動をしているとは思っていません。企業内の組合運動の推移というか、変化について言いますと、まず戦後の話に戻りますが、敗戦で日本の政治はもちろん、社会の体制・秩序がいきなり大きく変る時代ですから、過激な発言のようでも若い人の声が組合活動の面でも必要だったと思いますよ。

GHQが日本の民主化政策の1つとして、労働組合の育成を進めようとした時期には、青年部(若者)の運動が原動力になっていましたからね。だから組合の委員会でも青年婦人部の三役は決議権が無かったけれども、発言権があって革新的な発言をして、就業時間内でも組合の申請で活動でき、発言だけでなく進んで行動していました。今までの会社の制度やしきたりを変えようとする若者の発言は、ある時には、親組合と言われていた加藤(長次)組合長や役員に対して、突き上げるような発言をしたこともありました。

昭和25年、朝鮮戦争が始まる前から、GHQの対日政策が変わり、それをうけて政府の労働組合対策も変わってきて、青年部を二重組織と言うようになり、組合全体の活動を制限して抑えるようになりました。

けれども昭和30年以降は、前にも言ったように、「沖繩を返せ！三池闘争の支援を！反安保の闘い！基地反対！戦争反対！」などの活動と、賃上げなどの春闘、夏季と年末の一時金要求などの闘争を通じて、若者はもちろん、中堅労働者を中心に全体を結集して闘いました。これらの闘いは、企業外の住民との連帯行動に発展して、学生運動まで前進したと思います。

梅崎 当時、星加さんが青年部で副部長や総務

部長をなさっていたところに、その上の世代の人たちは、身分差撤廃とかを一応獲得してくれたわけですよ。

星加 そうです。その点、藤田さんに聞いたら一番よくわかると思いますが、藤田さんは初代の青年部長なんですよ。飯尾さんは確か2代目だったかな。

梅崎 でも加藤(長次)さんに対して青年部が突き上げる、この突き上げるポイントというのは何かまだ生ぬるいぞとかいう感じなんですかね。

星加 うん、まあそうですね。例えば会社回答に対しても、ここら辺で妥結するかせんかという決定的な段階が来るとね、判断が異なる。例えば賃金でも配分の問題になると意見が違ったり、解雇の場合も7日無届け、届け出ても2週間自己欠勤したら解雇されるとかね。会社でのルール違反もピンからキリまであって、譴責、減給、出勤停止、解雇とかの段階が四つぐらいあるものを会社が一方的に決めましてね。こんなのも改善しなければいかんとか言うてね、就業規則(懲戒規程)の改正を青年部から要求したこともありました。私が青年部の副部長のとき、その改正提案を組合員が1,500人ぐらい集まった所でしたね。いろいろありますよ。

梅崎 二重組織というのは非常に言い得て妙ですね。これは世代が違っていると、青年部は独身者が多くて、上の三役とかになると子どもがいたり女房がいたりという話になってくると、あんまり過激なことはできないというのもあると思いますし、交渉しているとやっぱりこの辺かなというふうな感じになってくるわけですよ。それに対して青年部がもっと過激にやれと。

星加 そうね。どうしても向こう見ずにやるからね。だから職場でもね、例えば、照明が暗いから照度を測る計器を持ってね、時間中ずっと照明を見て回ってね。薄暗いような事務所には改善要求を突き付ける。風呂の管理が悪いとか、そういう職場環境も含めて青年部が活動しました。職場には皆おりますから、いろいろな意見が出てきましてね。それを要求するわけです。委員会の中に

もやっぱり強気の人もおり、相協力してやりました。職場の意見を集めるため、職場ごとに「目安箱」を置いたりしてね。

梅崎 そういう強気の人と若い人たちは、やっぱり高野さんとかに影響を受けていると言えるんですか。

星加 あんまりそんな影響はなかったですね。

梅崎 そうなんですか。以前、兵頭さんの本を読んだときに、一種の「高野学校」という言い方をされていましたが、高野さんと会った人たちが考え方をすごく大きく変えられたとか、目を開かされたとか、そういうことは？

星加 そんなことないです。高野さんはそんなにたくさんは来られなかったですね。他の方は、総評からは大阪とか愛媛地評からいろいろ来て応援してくれましたけどね。それから住友関係は、今はありませんけれども、その当時、「住友五社共闘会議」というのがありました。ストライキやってお金がなくなったら、住友関係の組合からお金を借りる保証をしてくれたりして、それでストライキしたりお互いに応援しあったりしてね。昔は、大阪に本社があったんです。東京に変わる前に大阪の淀屋橋に住友ビルがありまして、そこへデモかけて赤旗立てたりしてね。これも新居浜から住友五社の組合の人が行くし、全金大阪の方からも応援が来るしね。全金大阪の人達にお世話になったんです。大阪も強いからね。だけど、住友ビルに赤旗立てたのはもう前代未聞でね。

南雲 青年部出身の方がそのまま時代が先に行くと組合役員になったのですね。

星加 そうですね。藤田さんも青年部長だったのがね、書記長になり、二代目の飯尾さんも書記長、委員長になられた。だんだんそのようになっていったね。

藤井 大体そういう傾向です。

南雲 ただ、昭和30年代も40年代前半も青年部は存在するわけですよね？

星加 存在しても、そのころはね、あんまり過激なことは…。委員会にも参加できんようになるしね。青年部は組合の方針に基づいてよく活動し

てくれたけどね。

南雲 突き上げもなかった。

星加 組合ができた当時の突き上げみたいなことはする場所がなくなって。私たちは委員会に参加して、裁決権はないけれども発言権がありましたからね。

藤井 青年部長だけぐらいは参加できよったと思う。私らも参加しよったけんなあ。

星加 ああ、そうか。やっぱりね、青年部の先輩が中心で組合運動やりよるからね。下から突き上げたりはしないわね。

南雲 藤田さんが青年部をやったところが一番過激だったんですかね。

星加 「過激」というのは当たらない。新しい時代に向け純真な意見であり行動でした。私たちはおとなしくなりましたけれどね。

梅崎 一番ご苦労された時代ですもんね。

《レッドパーージについて》

星加 昭和25年、朝鮮戦争が始まりかけたらね、レッドパーージがありまして、共産党系の方はバツサリやられましてね。共産党系の指導者はやられましたわね。あのとき労働組合も闘えんかったけどね。

梅崎 レッドパーージのときは、共産党系の方は青年部に多かったんですか。

星加 うん、青年部の役員の半数ぐらいは共産党系の人だったね。私のときは。

梅崎 なるほど。全体の中でも青年部に結構集まっている感じですね。

星加 そうですね。主要役員も共産党系だったからね。私なんかでも、夜会合に来んかって誘いがかかりましたけどね。私は藤田さんや飯尾さんの社会党系の指導を受けとったから、そっちは行かなかったけどね。

《住友機械の労働組合の青年部について2》

梅崎 じゃあ、民社党系は一切この時代には入ってこないという感じですか。

星加 そうね。代議士に立候補しても落ちよっ

たわね。やっぱり強かったのは社会党系、総同盟総評系は強かったからね。繊維関係の役員は民社党系が多かったね・・・。

梅崎 同盟とか、全労会議かな。

藤井 総評・社会党、全労～同盟・民社党いうね。

星加 新居浜はね、社会党系が圧倒的に強かったからね。

南雲 住友機械の組合員の中に民社支持は増えない？

星加 あんまり。

藤井 聞かなかったね。

星加 発言もしないしね。

梅崎 他の組合では「青年婦人部」というように、婦人と一緒にしているところがありますよね。こちらでは、男性の職場だから青年部だけだと思うんですけど。

星加 いや、婦人部もあったんです。

梅崎 婦人部も別にあつたと？

藤井 いや別じゃない、一つの組織で青年婦人部といていた。

星加 最初から青年婦人部。

梅崎 それでも女性に比べて男性は過激ですよね。

藤井 若いもんはやっぱり純粋に物事を考え主張するからね。それはさっきの話じゃないけど、年とともにやっぱり包容力もできてくるし、交渉の中で判断を迫られる場合も当然あるからね。だから、それは職場に居て外から見ただけだったら、当然要求に対する不満というものが出てくる。そういう意味で純粋な意見を出せば、ちょっと対立してるように外から見ると見えるけれど、それはもちろん、闘争が終わったら、そのことが原因で組織がバラバラになるとかいうもんじゃないんでね。やっぱり会社の方の労働組合の方針に対する批判というものが徐々に強まってきて、これは産業構造の変化の中で対応が変わってくるわけです。

《新居浜工場の組合分裂》

星加 昭和45年のとき、会社は当時の全国金属

の組織をつぶそうと思って、副委員長候補の私に対して係長クラスの対抗候補まで出して応援したね。

藤井 組合の役員選挙の時にね。

星加 会社の労務管理は、もう何年もかけてね、組合の組織を変えようと裏工作をしていたね。

南雲 組合の役員の方からみて、全金の組織を会社が嫌がっているという、ポイントは何だったんですか。

星加 やっぱり、ストライキをやるし、政治活動はやるしね。それで、まあ何ていうかな、三菱、石川島造船と競合するためには、造船重機の組織に入らないかんというんで、随分宣伝されてね。組合員だけじゃなしに組合役員も宣伝にかかってしまってね。われわれと共に運動していた人までね、分かれてしまって、執行部では寺川実さんを中心に数人が残っただけでした。

亡くなられたけど、全金の副委員長をされていた寺川さんと私と佐藤さんの3人だけ、もちろん、藤田さん、飯尾さんとあと組合員で20人くらい残ったけれども、私たちは組合事務所から追い出されてね。もうとにかく時間中でも係長中心に職場から組合事務所にデモをかけてくるんですからね。

南雲 係長が？

星加 係長中心に何十人も組合事務所へ押しかけてきてね。私たちが会社へ抗議しても会社はそれは組合の内部のことじゃというてね。普通だったら就業時間中にそんなことやったら止めないかん立場の会社でも、黙認していたね。

藤井 会社が組合員の職制の方を、生産性教育の中でやっぱり徹底した教育をして、それで物の見方、考え方を変えていくわけですよ。住友機械が造船部門（浦賀重工）を吸収合併したところから、その数年前までは造船関係の大手組合は全造船だったんですが、それが次々、切り崩され、全造船を脱退していった。大手では住友が一番最後だろうと思う。切り崩されて昭和46年（浦賀・玉島）～47年（新居浜）に脱退するわけですね。

南雲 組合分裂のときは全金擁護派が組合員の

中に結構いたはずですよ。

藤井 ええ。心情的には大勢おると思っていたが、実際、踏み絵的に迫られるとなかなか表面に出ないと。だから、分裂のときに私らもずっとオルグに回って、十何名か集めたのですが、表面に出るのはね。表面に出るとたたかれるからね。隠れた支持者・協力的な人は大勢居りましたがね。実際にもう全金組合員として残りますということで表面に出て共に活動してくれる人は30数名ぐらいでした。当時はまだ共産党系の人も残っているときだったしね。

南雲 会社との和解までに4年かかっていますが、その間、裁判闘争などをやっておられるわけですよ。

藤井 労働委員会（不当労働行為の追及）と裁判（損害賠償請求）の両方やりましたね。

南雲 会社の中で（全金は）少数派になるわけですよ。

藤井・星加 そうです。

南雲 その間は どうしていたんですか。仕事も普通に？

藤井 会社の仕事をしながら。

南雲 全員非専従で？

藤井 うん、非専従。

星加 だから、いじめられたんですよ、職場でつるし上げられてね。だから、私たち三役は何回も職場で全金に入ってる組合員を擁護するため現場へ行き、会社にもその都度強く抗議しました。

藤井 暴力事件もあったりしてね。

星加 そうそう。私たちはすぐ現場へ飛んでいたりしてね。

それで、昭和47年の8月は組合の定期改選の年だったんです。そのときに会社側もちゃんと準備してきたね、組合を分裂させるという立場でね、全金系の役員を全部外してね。全金支持派以外から役員の大立候補を出して・・・。

藤井 会社が役員をそろえた。

星加 うん、役員選挙が一つのきっかけになって表面化した。詳しいことは、「全金愛媛地本35年史」の104頁～124頁に記録しています。

藤井 会社がいろんな教育に使った資料もね、匿名で情報提供してもらって、法廷闘争などに十分活用できました。その方々は名前は出せんけれども、私たちのやっとなことは、全金のやっとなことは正しいと思うと言って、本来はそういうものを見せたり外部に出したりしてはいけない資料まで提供してくれた。

梅崎 そういう方々は、かつての全金の運動の支持者でもあったし。

藤井 そうでしょうね。心情的にはその後もずっとね。

《会社側の生産性運動の表面化》

梅崎 組合分裂前の話ですが、職制を経営側が教育するときに、生産性運動を入れて。

藤井 そうです。生産性向上運動。

梅崎 考え方を考えさせるんだみたいな。これはいつごろからですか。先ほどのお話は昭和46年ぐらいのことだったと思いますが、生産性運動自体はもう少し早く入っているんですか。

藤井 前からあったけど水面下で、動きが表面化したのは浦賀重工を吸収合併した頃からのので昭和44年ぐらいですね。

南雲 そうすると、生産性運動が表面化してから分裂までは結構短期間？

藤井 浦賀が先に分裂させられ、それから玉島の分裂、そして新居浜。浦賀、玉島は昭和46年。生産性教育を職制組合員に泊まり込み研修していた会社のテキストがあって、それを手に入れたんです。不当労働行為の証拠になるんでね。それで会社のしていた不当労働行為を公的な場でかなり追及できたし。バックというか、全国金属が産別組織として全面的に支援してくれたから、圧倒的な少数派でも和解にまでこぎ着けることができたね。

梅崎 なるほど。当時は、佐竹五三九さんが総評・全国金属の委員長？

星加 分裂当時の全国金属の委員長は松尾喬さん。書記長が佐竹さんだったね。

藤井 佐竹さんは書記長を長いことしたわね。

星加 佐竹書記長が当時、新居浜へ来られましたね。私が職場を案内して回った記憶があります。それでね、佐竹さんが「星加君、だいぶん職場の雰囲気が変わったなあ」と言われたのを覚えてるんです。佐竹さんと一緒に職場をずっと回ったんですよ。顔を合わせても挨拶もしないし、職場の状況はもう駄目だったですね。執行部が半数以上やられるだけあって、職場の方もいかれてしまうてね。

それで会社側についた役員が、星加、寺川、佐藤の不信投票を職場でしまして不信とし、組合事務所から追い出されたね。

南雲 ただ、総評全金の規約上、追い出されようが何しようが、個人加盟ですからね。

星加 そうです、個人加盟。

南雲 本来は追い出される筋合いはないと主張できると思うのですが。

藤井 ただ、それまでのいろんな資料を事務所に置いてあったからね、持ち出せてないんですね。何か焼いたとか何とか言っていたね、知らんけど。

藤井 もう焼却処分してしまったような。

星加 事務所も変わったしね。

南雲 それは非常に残念です。我々も見たかったのですが。

《少数組合となった後の団交と全国金属に残った理由》

南雲 少数派になった後の団体交渉はどうでしたか。

藤井 団交自体は時間的な差別はやむを得るので、どうしても多数組合と先に団体交渉をして取り決めをする。結論は変わらんけれども、後から同じように団体交渉を持って、回答も同じようにしていました。法廷闘争の和解後は変わってきまされたけどね。最後は私一人になったのですが、最後までそれは一応やってくれました。

星加 法廷闘争をやりましてね。組合事務所も小さいながら会社の正門入り口に作り、会社も認めましてね。

藤井 事務所も組合掲示板もね、和解条件のな

かで認めさせた。

南雲 そうすると、もう全金派はいらっしゃらないのですね。お二人が総評全金派に残ろうと思ったのはどうしてですか。

星加 私はね、やっぱり全金のやっていることは正しいと今でも思ってるんです。指導を含めてね。だから、企業別組織では受け入れなかったけれども、労働運動としては正しい運動だと今でも思っているんです。

藤井 組合分裂のときにね、会社のいう生産性教育は、以前に青年婦人部長もしていただけに、間違ったことをやっていると感じました。私は分裂当時は役員ではなかったけどね。会社のやり方はおかしいと感じて、分裂のときに残って頑張った一人です。

その関係で分裂から7年後ぐらいに全金愛媛地本の専従書記長になりました。前任者が定年で辞められるので引き継ぎ、私も定年まで勤めましたが、いまだに後継組織JAMの手伝いをしたり、連合愛媛の労働相談のアドバイザーをしながら、今は時期的に秋季年末闘争の手伝いをしています。退職後は連合の立場だから、連合傘下の産別に入っていない企業内組合のようなところの交渉にも回ったり、労働相談からの団体交渉や個人加盟の地域ユニオンを作って対応していますし、自分自身もJAMシニア関係の事務局を担当するなど、結構ボランティア的な業務があります。

《戦後の工職身分差撤廃》

梅崎 次に、今振り返られて、労働組合の初期のころに交渉などで獲得したもので、思い出に残っていることはありますか。

星加 まず第一に労働条件はよくなりましたよね。それから、職員、工員の差別もなくなったしね。労働時間も短縮したしね。それから、現場で特殊作業といまして、例えば鑄造職場では、鉄を溶かしたのを「湯」というんですけど、鑄型に流し込むとき、ほこりと暑さでものすごい、このような職場環境の悪いところに特別手当を出させ職場の改善をするなど、事務所と現場の職場環境

も随分よくなったしね。

南雲 そのころの資料を見ると、最初、工員は日給で、その後日給月給になって、最終的には月給になったというのは身分差撤廃だとわかりますが、これ以外に身分差が撤廃されたと実感されたことは何でしょうか。例えば食堂が一緒になるとかですか。

星加 そうですね。

藤井 まず入る門が別々だったのが一つになる。これはもう一番よく分かる例だけど。

星加 違って社員バッジや作業服、帽子も同じものにしたね。

梅崎 これは社員証みたいなのに変わるわけですね。

藤井 ええ、変わって。

星加 一緒になりましたね。

南雲 福利厚生、例えば社宅とかの差別とかも撤廃されるんですか。

星加 そうですね。職員の人は前田社宅でしたが、工職統一後は工員の人でも前田社宅に入ったりね。ただし重役は別のところで山田社宅でした。

梅崎 賃金は割と早めに職員との差が撤廃されて、工員も一緒の月給になると思いますが、そういう細かい、社章などは長い時間かけて変わるのですか。それとも賃金の払われ方と同じ時期ですか。

星加 大体、社章とか、入り口とか、風呂場とか、食堂とかは交渉して、身分を統一してすぐというぐらい、1年以内に一気にね。

藤井 私、昭和33年に入社したんだけど、そのときは、工職の身分の違いは全然なかったですね。

《職階制、能力給の導入》

南雲 身分差撤廃の次の段階で賃金をどうするかということで、職階制や職務給の導入問題がありますね。おそらく組合としては導入に反対していたと思いますが。

星加 そうです。職階制の提案がされて、膨大な資料を私たちもらってね。いろいろ分析して、これは反対だ言うてね。随分やりましたけどね、

結局押しきられてね。

藤井 導入されたね。

南雲 反対のポイントというのは？

星加 やっぱり身分差別になるんじゃないか、公平な評価・査定ができないとね。

南雲 身分差別というのは？

星加 うん。あれ(職階)は1級から8級まであってね。6級は大体係長クラスでね、6級以下は組合員です。7級以上はいわゆる管理職。そういうふうにはランク別に社員が格付けされます。同期で入っても職場によっては差別されるしね。それをみんなが公平だと思えるようにできれば納得するけど、人間のやることですから公平じゃと思っても、人間は欲があるから、個人別には不満がでるしね、そんなのは受け入れられんというのが職場の雰囲気だったね。

会社の言い分は、そういうものを作らんと合理的な賃金の配分ができないし、一時金も配分できないから、職階に基づいてランク付けをして決めなければ公平にならないかということだったね。私らは職階を入れられたらますます管理職の立場が強くなるし、組合員の分断につながると言って反対した。

南雲 むしろ年功に賛成で。

星加 はい。

南雲 結果的には能力給や査定が入りますよね。

星加 そうですね、会社は今後の賃上げ(定期昇給を含む)や一時金の支給にあたって、職階制の1~8級までそれぞれ単価を決め、職制が個人個人を査定して支給額を決めたい、とのことでした。

梅崎 だから、組合としては、能力給も職階給にちょっと否定的で、生活保障的なものをきちんと考えて、勤続年数を反映するという方針だったのですか？

星加 組合は、定額と一率分(定率)を基準にした配分案を主張しました、それは年功序列賃金を支持し求めたことになるけれども、定額分で底上げをしたね。

梅崎 求めていた。

星加 会社の方は能力給という形でやりたいと。

梅崎 その要素の割合をどんどん大きくしたいという感じですか。

星加 最初は勤続年数に応じた勤続手当などもありましたが、賃金を職階で決めるようになってからだんだん整理し廃止されました。先ほど言ったように、作業のきつところは特殊作業手当ということで保障しようという形に変わりましたね。

ストライキまでして反対できなかったのは、組合員のなかに職階が5級、6級クラスの人たちがかなりいてね。その人たちは職階制で決められた方がいいですからね。

藤井 団結しにくいんですね。

梅崎 組合員間の利害が一致していない。

星加 だから、私なんかもね、会社に対して、賃上げ総額の要求は案外まとまって簡単にできるんだけど、終わってからの配分闘争で頭を痛めました。

梅崎 それは一率ベースではなくて総額を取った後に、割合みたいなのを取った後に組合側で配分するということですか。

星加 組合側の案は、「定額」+「一率」+「査定」の簡単な配分を提案するんですよ。ところが、会社の方は能力給的なものを多くしたい、定額部分をあまり多くしたくないという立場で、会社と組合と最後まで交渉するんですけどね。これはいつも対立して、委員会でも弱るんよ。

南雲 対会社もそうですし、組合の中もまとまらないでしょうね。

星加 だから大変なんだ。配分でストライキをやることはなかったですね。

藤井 ないね、難しい。

星加 総額を上げることには一致協力してやるけど。だから私たち執行部も、総額が決まるときに配分も決まるような形で進めないと、切り離れたら後で大変だから。

南雲 分けて交渉するんじゃないくて。

星加 そう。もういっぺんにね。

梅崎 長時間になりましたけども、今日はインタビューさせていただいて、ありがとうございました。

一同 ありがとうございました。

謝辞) 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金「戦後労働史におけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の基礎的研究」〔基盤研究B〕【研究課題番号：23330115】の成果である。ここに記して感謝を申し上げたい。

(*) 住友重機械工業における組合分裂に関するオーラルヒストリーとしては政策研究大学院大学『兵頭傳オーラルヒストリー』(2003年、全9回、人事担当者からの視点)、慶應義塾大学産業研究所『伊藤祐禎オーラルヒストリー』(2006年、全7回、住友重機械工業内の別組合である全造船浦賀分会の組合分裂について)、『平沢榮一オーラルヒストリー』(平成24年度日本学術振興会科学研究費補助金「戦後労働史におけるオーラルヒストリー・アーカイブ化の基礎的研究」〔基盤研究B〕【研究課題番号：23330115】、総評全国金属からの視点)がある。

Labor Movement and Union Divide in a Local Firm after the Formation of Sōhyō

- An oral history interview with Mr. Hoshika and Mr. Fujii

NAGUMO Chiaki
UMEZAKI Osamu

This paper is an oral history of the leaders of Sumitomo Heavy Industries' labor union, Mr. Hoshika and Mr. Fujii. The union was formed right after the WWII; however, majority of the members withdrew and formed a new union in 1972. Mr. Hoshika and Mr. Fujii, who were part of the minority members who remained

loyal to the union, describe the union divide. This paper illustrates the history of the labor movement in a local firm after the formation of Sōhyō (General Council of Trade Unions of Japan) and the resultant union divide, about which historical material is rarely available.